

7/25 (日)

(第3種郵便物認可)

見て知つて伝える義務

3月3日、日本では女の子の成長を祝つひな祭りの日、私たち17人の仲間は、ポーランドのアウシュヴィツツにいた。1991年、チェコのテレジン収容所にいた幼い子どもたちが描いた絵の展覧会を開いたのがきっかけで、以来、四分の一世紀にも及ぶ長い間、時には一人で、時には娘と、友人と、あるいはテレビのクルーと何度も訪れたこの場所。今回は、「私たち世代が、見て、知つて、伝える義務があります…ぜひ」という誘いにのつてくれた人たちが一緒だ。

で、命がけで真実を描き残
そうとした画家たちのこと
を語つてきた。悔しいけれ
ど、30行の文章よりも一枚
の絵の方が力がある。

悔い多い罪の跡、ポーランドにとつては悲しみと憎しみのまざる負の遺産だが、それでも、両国とも、高校生には必ず見学させるとい

A black and white photograph showing a long wooden table in a room. On the left, a bunk bed is partially visible. The table has a simple rectangular top and four legs. A chair is tucked under the table on the right side.

は「難民受け入れ拒否」の政府に抗議する市民のデモがあつた。

大切にしたい資料であることは分かるが、収蔵庫に置くではなく、多くの見学者に見せてほしいと言うのが、私たちの一一致した思ひだつた。

う。初めて訪ねた仲間の感想はまだ聞いていない。もう少し時間をおいたら話したいと願っている。

テレジンは、アウシュヴァイツと違つて自由にどこでも見て回れる。かつて子

だが、街の中には、当時、
アウシュヴィッツへ人々を
運ぶ貨物列車が通った線路
のレールがあり、一部はか
つての収容所のままの姿で
残されている。私たちは、

戦争は、人間を被害者にもするが、加害者にもする。人間は、どこまでも残虐になれるといつ事実が語る恐怖を、私はアウシュラヴィットを訪ねるたびに噛みしめ

ヒロシマの被爆者で、核廃絶を訴え平和を願う旅を続けてきたMさん、元教師で、子どもたちに命の大切さを教えていたKさん、詩人、歌人、俳人、各地の9条の会で知り合った仲間もいれば、高校の同窓生もいる。最年少のT君は、中学館長と会い、美術品の収蔵庫を見せていただいた。各地の収容所でひそかに描かれた絵、ドイツ軍の命令で描かされた絵、そして、生き残つて解放後に描いた絵、膨大な数だった。私は、テレジンで、「絵を描く」ことが生きる力にな

時代は元レジン展の活動をしてくれた大学生、就活よりも経験を…と参加してくれた。 昨年の「教室を開く」との信念で、女性画家と、その励ましに応えて明るい絵を描くことができた子どもたちのことを伝えるために本を書いた。 アウシュヴィッツ博物館の

血の匂い——アウシュビツツの旅より

ノの旅より

わたしは生きているのか
わたしは死んでいるのか

異を犯したれば、せない
ただ民族が異なるというだ
けで

わたしの名前はすでに奪わ

ない

わたしを包んでいた衣服は
すべて剥ぎ取られ
わたしの、しつとりとした髪
の毛は
すべて切り落とされ
わたしは生まれたときの嬰
児の姿になる

××番、列を乱さず中に入
れ！
ナチスの兵士ががむしやら
に
わたしの背中を押す

激しい痛みと血の匂い
けれど、この痛みと匂い
まだわたしが生きていると
証しではないのか

一瞬、憎悪と怨念だけを残して
わたしの痛みも
血の匂いも消えていった

そ
まだわたしが生きていると
いつ
証しではないのか

××番、列を乱さず中に入

ナチスの兵士ががむしやら
れ！

に
わたしの背中を押す

シャワー室と呼ばれたその

931年生まれ。所沢市生まれ。東京学芸大学卒業。56年第一詩集「石の歌」刊行。埼玉詩人クラブ（現埼玉詩人会）結成に参加。詩集「ほのほのと、百四十歳」「徘徊者」、評論集「現代詩、されど詩の心を」など。埼玉文芸家集団副代表。詩誌